

『教長古今集註』の注釈史的位置

一 呪的テキストとしての崇徳院御本

治承元年九月、藤原教長は守覚法親王に『古今集』注釈を伝授する。この時、崇徳院御本の復権が重要な契機となっていることを前稿で論じてみた。¹⁾すなわち、巷間噂となり恐懼された崇徳院の怨霊を鎮撫することを暗黙の動機とし、それゆえに崇徳院御本をもとにした『古今集』全歌注釈を企図したこと、そのことが、注釈内容まで規定していたのではないかということである。ここでまず、崇徳院御本が注釈内容に与えた影響から具体的に検討してみたい。

まず、つぎのような注釈をとりあげる。

ユキノキニフリカ、レルヲヨメル

素性法師

ハルタテバ、ナトヤミエンシラユキノカ、レルエダニウグヒ
スノナク (六)

コノ哥彼本ニハ、ナトヤミラムトハベリ。コレコソハジメヲ
ハリカナヒテキコユレ。ミエントハベルハ、ウグヒスノコ、ロ
ニタガヒテホイナクコソ。

『教長古今集註』の歌本文（注釈伝授の時に使用している本で守覚法親王所持本かという）と、崇徳院御本の本文に相違がある場合に、教長は、このようにその異同を指摘しながら、崇徳院御本の優

紙 宏 行

位性を述べるのである。その理由は、同本が「ハジメヲハリカナヒテキコユレ」という、詞づかいや文脈の論理的整合性に適っていることであり、他本（普通本、流布本）の「ミエン」では「ウグヒスノコ、ロニタガヒテホイナクコソ」、擬人化された鶯の心を正確に表現できていないという。

この歌のほかにも、同じように『教長古今集註』歌本文と崇徳院御本本文との相違がある歌が見られるが、「カケアヒテ、オボツカナキコトモキコエズ」(二二)、「今少シカケアヒテキコユレ」(五五)、「コレニテハ、カケアハズゾキコユル」(五二四)など、論理的整合性という同様の理由で崇徳院御本の優位性を主張しているのである。

教長は、「ハジメヲハリカナヒテキコユレ」という文脈上の論理的整合性が、理想的な歌の一規範であると考えていたらしく、「ハルヲハ、キノメハルコトナルヲ、キノメトモハルノト、リテ、ユキノフルヲ、ハナトミテ、ハナ、キサトナレド、ハナノチルトヨメルハジメヲハリ、カケアヘリ。ウタノ本トイフベシ。」(九)と、「ハジメヲハリ、カケアヘリ」と評されているこの九番歌は「ウタノ本」であると述べている。この規範意識の意味はここではふれず、教長が歌の規範と考える特質に崇徳院御本本文の歌が適合している、ということ根拠として、同本の優位性を主張していることを確認し

ておきたい。

ところが、顕昭は、教長の注釈と崇徳院御本本文との矛盾を次のように指摘するのである。

我宿ノハナフミシダクトリウタンノハナゲナルヲコ、ニシモク
ル

(四四二)

フミシダクトハ、フミフスル心ナリ。後拾遺ニモ、
ナツカリノタマエノアシヲフミシダキムレキルトリノタツ
ソラゾナキ

トヨメリ。此古今ノ歌、第四句普通ニハ野ハナケレバヤトア
リ。ノハナケレバヤ、ワガヤドノハナヲシモトリノフミシダ
クラムトヨメルト、コ、ロエラレタリ。此証本ノ、野ハナゲ
ナルヲトイヒテハ、スコシ心ユカズ。教長卿ノ注モ、ナゲナ
ルヲトハカキナガラ、釈ハノハナケレバヤトイフコトバノ定
ナリ。其釈ヲ、ノニモハナハアルラム、ナドコノワガヤドノ
ハナヲ、トリノキテフミチラスゾトガムルナリ。顕昭案云、
ワガヤドニハ野モナキヲ、コ、ニシモハナニカクルトヨメル
也。春ノ歌ニ、クレナバナゲノハナノカゲカハトヨムモ、ナ
ゲトハナシト云詞也。

(「顕昭古今集注」)

教長は崇徳院御本の「野ハナゲナルヲ」という本文を優位である
と主張しながら、解釈においては「野ハナケレバヤ」という普通本
の本文に依拠して解釈していると、顕昭は鋭く指摘している。同様
な、教長の注釈における矛盾、というより粗忽な注釈態度は、他に
一〇一番歌注においても同じように顕昭によって見逃すことなく暴
き出されている。しかし、興味深いことに、続けて顕昭は「顕昭案
云」以下で、崇徳院御本本文に即した新解釈を試みているのである。
教長の過誤を弥縫して彼の名譽を回復しようとしたわけではもちろ
ん、ないだろう。顕昭は、教長のような矛盾を犯すことなく、崇徳

院御本本文を何とか合理化しようとして無理を承知で苦しい新案を
提示した。顕昭本来の自説は前半部に既に示しており、これは、あ
る意味で、注釈内容の歪曲である。顕昭も、崇徳院御本の証本性を
受け入れ、同本の正統性を守ろうとしたのである。

教長が犯した矛盾は、杜撰な注釈態度をはからずも露呈してしまっ
たが、そのこととは別に、守覚法親王への教長の古今集注釈伝授の
場においてはどの『古今集』本文が使用されたのかという疑問が再
び水面に浮上してくるのである。²⁾崇徳院御本のほかに守覚法親王所
持本、また『教長古今集註』本文の本、以上最大三本が想定され
(ただし後二者は同一か)、このことは、教長の杜撰のみに起因する
のではなく、当時の『古今集』本文の錯綜状況が同注釈の場に象徴
的な形で持ち込まれてきたと見るべきであろう。

教長は、崇徳院御本の絶対的優位を主張する。その根拠といえば、
自身の考える和歌規範に適合するということのみであって、自身の
注釈の矛盾にも気がつくことはなく、崇徳院御本に対しては盲目的
でさえあるといえよう。崇徳院近臣の教長であり、注釈伝授の相手
が、院の甥で、院にゆかりの深い仁和寺の守覚法親王であって、そ
もそもこの注釈伝授を開始した動機を考えてみれば、教長の態度は
当然のものとはいえる。顕昭は、教長ほど同本を絶対視してはいな
いが、とはいえ、同本を合理化する無理な解釈をあえて提示し、崇
徳院御本の正統性、証本性を保持しようとしている。顕昭の場合は、
同本によって注釈内容を歪曲されてしまった。教長も顕昭も、崇徳
院御本を不可侵のものと見、そのことによって注釈が規制されてい
る。前稿で、同本を「呪的テキスト」と私に呼んだゆえである。
もっとも、崇徳院御本によって注釈内容が歪曲させられた明らかな
例は、両注とも多くない。しかし、少なくとも、教長の注釈伝授の
場においては、『古今集』の一証本に冠せられた「崇徳院」という

凶々しい名から放たれた眼差しを常に意識し、その意識が注釈内容をも暗然として形で規定していったものと思われる。

以上のような『教長古今集註』の隠然たる性格を、場の問題と絡め、『教長古今集註』の特質について考察する起点として、始めに確認してみたのである。

二 教長の学問形成

教長は、守覚法親王に『古今集』注釈を伝授するに際し、次のような感慨を残している。

讃岐院当帝之昔、法性寺入道以下、公卿侍臣男女之歌仙、各演其秘説。観蓮一度無漏其座。兼又往年、謁俊頼基俊、談宗延勝超、探和歌之旨趣。而其議不廢忘、今遇此道之中興。於大王御前、写斯如瓶水。観蓮空納胸中之蓄懷、已臨老後、悉散之。且述鬱憤、且蕩堅執。豈非菩提之要路乎。幸甚々々。

〔諸雜記〕所引教長本奥書

崇徳天皇の在位中、天皇主宰の古今集注釈の「秘説」を披瀝し合う会がしばしば催されたという。教長は、「観蓮一度無漏其座」という熱心な研究態度でその場に臨んだと自負するが、その時の師友として名をあげているのは、法性寺忠通以下の「公卿侍臣男女之歌仙」である。忠通は教長の書の師であり、崇徳天皇内裏の歌会でも同席していた。また、これとは別に、俊頼、基俊や、宗延、勝超にも会い、「和歌之旨趣」を求めたという。俊頼卒時には教長は二十一歳であり、どの程度の交流があったのかわからないが、「謁」していた可能性はなしとしない³⁾。このように、教長は諸氏の学説を吸収し、研鑽を積んで自身の歌学を形成していったのである。教長の古今集注釈は、一定の師から伝授された説を継承しているのではなく、多数の歌学者の説を多様に取り込んで形づくったものである

と主張しているのである。

教長と崇徳院との学問上の関係については、院の遺児元性法印が、『古今集』注釈を教長から伝授されるに際して、次のような、教長の人物評を残している。

同（治承）二年正月十三日、於同庵室、重受入道相公了、去安元二年四月、雖伝受、古歌之為体、輒難練習、仍度々遇此禪門、伝其秘、年来蒙故院御諷諫、異余人説而已。

〔源承和歌口伝〕所引教長訓点本奥書

元性によれば、教長は、「年来蒙故院御諷諫」と伝えられる人物であったというわけである。教長の意図的な自己宣伝によるところが大きいのもしれないが、ともかく、崇徳天皇から歌学上の「御諷諫」（古今集注釈に関することか）を受けていたのであろう。事実、『教長古今集註』には、一箇所だけだが、「コレヲヨシトコソ讃岐院ヲホセラレシカ」（三番歌注）と、崇徳院の発言の引用がある。また、教長撰の私撰集『拾遺古今』（散佚）について崇徳天皇の批判に教長が答えたことが、

拾遺古今問答⁴⁾ 崇徳院御難⁵⁾ 教長御答

と、『古蹟歌書目録』にあることによって知られている。『拾遺古今』について崇徳天皇が「御難」を表明し教長が「答」えて弁明したというのであろうか。「御諷諫」といい「御難」といい、内容はわからないし、若き崇徳天皇にどの程度の歌学的蓄積や和歌評論の見識があったかはわからないが、ともかくも崇徳天皇とも歌学上の論議があり、それが『拾遺古今問答』なる一書にまとめられたものである。

その『拾遺古今』の編集に、清輔が熱心に助力したことを、かの俊成が記録している。「其の時清輔、彼につきたるものにて、かたはらに候ひてもろとも仕りて候ひし、見苦しきことども候ひき」

（『正治奏状』と清輔はつききりで援助したといひ、俊成は、「見苦し」いことと評している。正治の切迫した時点での俊成の嫌悪感とはちがくとして、教長は、清輔とは歌会に同席するなど親しかったらしく、当代の碩学からも歌学を学んだのである。

教長は、自身で記している、忠通以下の「公卿侍臣男女之歌仙」や俊頼、基俊、宗延、勝超ばかりでなく、崇徳院、清輔らからも歌学を学び、貪欲に吸収していった。さまざまな学派の区々たる学説に對峙し、諸説を雑多に消化して、自身の歌学を形成していったという主張である。これが、真になされていたとすれば、『教長古今集註』の顯著な特徴となるであろう。

三 『教長古今集註』と先行歌学書

しかし、教長は、諸先学の名や先行歌学書名を明記する形ではほとんど引用していない。多くの先学から学んで自説を形成していった様相を個々の歌に即して跡づけることはできないのである。

清輔説を修得したことについては、序注の六義注釈の一節に、

コノウタノコト、清輔朝臣ノ奥義抄ニクハシクシルセリ。カサネテノブベキニアラズ。

と清輔の『奥義抄』に言及する。また、「故人云」として、

故人云。ツラユキ仮名ノ序ヲカキテ、キノヨシモチニ（源望ニ、真名序ヲアトラエケルヲ、父ノ納言長谷雄ワレカ、ムトテ、カケルトイヘリ。敦光朝臣モ無疑紀納言ノ筆ナリト、讃岐院ニ申ハベリキ。和哥序ノ秀逸云々。和語ナレバ以仮名序ヲ基トシカケルナルベシ。）

と、紀長谷男が『古今集』真名序の筆者であるという説を引いている。これは『袋草紙』にのみ見られる伝承で、顕昭は否定している（『万葉集時代難事』）。この「故人」とは清輔のことを指すのかもしれない。

れず、清輔は、治承元年の注釈伝授の三か月前に卒しており、可能性は高い。『教長古今集註』の注釈説は、俊頼らの所説はともかく、清輔説は何らか受容していることはほぼ確実であると思われる。

試みに、教長自身も学んだという清輔の古今集注釈（『奥義抄』所収）と比較対照してみる。現存『教長註』では、二百十余首（現存する巻十七の途中まで）に注釈を加えているが、このうち、『奥義抄』とも重複しているのは十四首である。その十四首の注釈内容を検討してみると『奥義抄』と類似しているものは少ないのである。「カサネテノブベキニアラズ」などと敬意を表し、清輔説を受容しているのはほぼ確実と推測されるのだが、歌注の具体的な文脈には、その受容の様相が見えてこないのである。これは、意外なことではなからうか。

両者注釈を加えている歌のうち、たとえば、「五月まつ山ほととぎすうちはおき今も鳴かなむこそぞのふる声」（一三七）について、

（『教長註』）

（『奥義抄』）

ウチハブキトイフハ、ウチマカセトイフコトナリ。ホト、ギスハサツキニナクヲ、アダシクトモコゾノヤウニウチハヘテナケ、トイブカリヲモエル心ナルベシ。	打はおきとはうちはぶりと云ふ也。はおるとは羽をたたくなり。鳥はなく時は何れの鳥もひるは羽を打てなく也。万葉にも打はぶりは鳴けどもなどよめり。
--	--

という注釈がある。「うちはおき」の語について、教長は「ウチマカセテ」と解するのに對し、清輔は「うちはぶり」すなわち「羽をたたく」意と解している。ちなみに顕昭は、「オノガハブキトハ鶯ノ翫ツ風ト云也。夏ノ歌ニ、ヤマホト、ギスウチハブキトヨメル、同心也」（『顕昭古今集註』一〇九番歌注）と述べ、もちろん清輔と同じである。現代の注釈学の成果からいえば清輔説のほうが正し

いということになる。「うちはぶき」語釈に続けての解釈も、教長の注釈は「イブカリヲモエル心」を読み取っていて、願望の心を読む、おそらく通説とは異なる、特殊な解釈となっている。

さらに、極端な著名な例では、「やややまで山ほととぎすことづてむわれ世の中に住みわびぬとよ」(一五二) に対して、

〔教長註〕

ヤヨヤハ、八夜ナリ。フルクハ、ヒサシキコトニ、七日、七夜トイフヲ、セメテヨノ中ニスミワビヌ、コレニモスギテ八夜トヨメリ。コトヅテムハ、コトヅケムトナリ。ホト、ギスハシデノヤマトリトイヘバ、カシコニアランテ、ハ、ナドニカクイヘ、ナドヨメルベシ。イトゞ心ホソクアハレナルウタナリ。

〔奥義抄〕

やややとはしでの山ぞなど積したる人もは べれど、げにともきこえず。やややとは、やしはしまてといふ心也。山よりくる鳥なれば、うき世の中に住みわびぬ、山へいりなむなどことづけむといふ心にこそ。

問曰、ほととぎすはしでの山をすぐる鳥なれば、人などにおくれて世の中なげかしく思ひける時よめる歌にや。われ世の中にすみわびぬにいたりといへよとよめるにこそ。集にも、

なき人のなどにかよはばほととぎすかけてねにのみなくとつげなむなどはべり。又、

しでの山こえてきつらむほととぎす恋しき人のう

へかたらなむなどもよみたり。万葉には、

やまとにはなきてきつらむほととぎすながなくごと人ぞおもほゆ

かやうによめる心にや。

答云、是義も故なきにしもあらず。題しらぬ歌にて待るぞあやしき。但、古集ともに故ある歌もことはからぬ多かり。

という注をそれぞれ施している。教長のように「ややや」を「八夜」の字を宛てて解するのは、他の注釈にはない、きわめて特異な解釈である。顕昭も「八夜マデコトヅテムト云コトハ、ゲニモト、キコエズ。又八夜ヲバ、ヤマトコソイハメ、ヤヨマデニトハイハズシテ、ヤヨヤトイヘル後ノヤ文字、コ、ロエラレズハベリ。又此歌在猿丸集。其詞云、アダナリケル女ニ、モノヲイヒソメテ、タノモシゲナキコトヲイフホドニ、ホト、ギスノナキケレバトアリ。此詞ニツケテモ、八夜トイヒテハカナハズ」(『顕昭古今集注』)と証歌まで引いて強烈に批判している。「八夜」説に基づいて歌に詠み込まれた例もなく、教長のこの説の典拠は不明で、おそらく教長が、漢字を宛てることだと思いついた、独自の奇説であると考えるのが妥当であろう。歌語の本説が「語の音や表記からの自由な連想」によって「自由大胆に」創造・改変されてゆく道すじは、『俊頼髓脳』などによって既に闡明されているが、教長の注釈伝授においても確認でき、この「八夜」説はその典型的な例といえよう。

教長は、清輔説を熟知していたはずである。にもかかわらず、こ

の歌の注釈において、奇矯な「八夜」説を提示したのは、教長は、清輔説を強く意識し、対抗しようとして、あえて異説を提示しようとしたからではないだろうか。通説とは大いに異なる説を提示することによって、自身の注釈の独自の価値と自身の歌学者としての存在感を誇示しようとしたものであり、これも本説が捏造されるひとつの機制ではある。

ただし、教長注釈の場合は、このような本説捏造の事例は多くはない。また、そこからいわゆる「歌学的歌語り」へと自在に展開してはゆかない。むしろ、そのような恣意的な本説の創造・改変には、どちらかといえば抑制的であったように思われる。

教長が清輔説を意識していたことは、次のような、両者の説が近似している注においても認められる。異説を提出しえないような語義解釈で、言いまわしを変え、独自色を出そうとするのである。

「かきくらし（かきくづし）教長注本」ことはふらなむ春雨にぬれ衣きせて君をとどめむ（四〇二）に対し、

『教長註』

カキクツシハ、イタクフレトヨ
メルナリ。モノイタクイフ人ヲ
バカキクツシイフナドイヘリ。
ヌレギヌキセトハ、ソラゴトヲ
イフ。キミヲトゞメントシテ、
アメノフルニ、ナカヘリソナド
イフハ、モトノコトニハアラデ、
アメヲカコチテトゞム。マコト
ニハシバシモコノ人ヲヤラジト
ナリ。

『奥義抄』

是は雨いたくふりてとゞまり
なば物へいきつることはそら
ごとになりなむずれば、ぬれ
衣きせてとはよめり。雨にぬ
れぎぬともそへたる也。

とあり、「ぬれ衣きせて」の語句の解釈は、それぞれ「ソラゴトヲ

イフ」「そらごと」になりなむずれば」となっていて大きな相違はない。しかし、『奥義抄』が「雨にぬれぎぬともそへたる也」と簡略に結ぶのに対し、「マコトニハシバシモコノ人ヲヤラジトナリ」と主題に踏み込んで詳細に論じている。どこかで『奥義抄』とは異なる特色を出して差別化し、自説の権威化を図ろうとしたのであろう。以上のことは、対『奥義抄』との関係だけでいえることではない。清輔以外の古今集注釈に対しても、同様のことがいえるのである。いわゆる通説とされてきた説に対しても、あえて異説をもって挑もうとする例があげられるのである。

たとえば、「春日野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり」（一七）の「わかくさ」について教長は「男モ女モイフ」とするのに対し、俊頼は「婦、わかくさといふ」（俊頼髓脳）と女性に限定し、『奥義抄』『和歌童蒙抄』『顕昭古今集注』も、女性限定説である。これも、通説に対抗して、あえて異説を提示してみせたものと思われる。

また、もうひとつ例をあげれば、「こひこひてまれにこよひぞ逢坂のゆふつけ鳥は鳴かずもあらなむ」（六三四）の「ゆふつけ鳥」は、難義語のひとつであるが、この語について、教長は、

ユフツケドリハ、ニハトリナリ。ヨノナガクテヒロキヲ、ユフシデナドイフモノツケタルニ、タレバ、ヤガテソノナニ、ユフツケドリトイヘルナリ。

と鶏の尾に「ユフシデ」を付けた姿「ニ、タレバ」それをいうのだと、類似性のみを指摘する解を提示している。「ヨノナガクテヒロキ」という特徴を持つが、鶏そのものにすぎないという。他の注をあげてみると、

鶏の名なり。鶏に木綿をつけて山に放つまつりのあるなり。

（俊頼髓脳）

鶏に木綿をつけて四の関に至りてする祭なり。 (『奥義抄』)
おはやけの御はらへに、鶏に木綿をつけて逢坂に放つなり。

(『綺語抄』)

鶏に木綿をつけていたすはらへのあるにより、ゆふつけ鳥とは
いふ。 (『和歌童蒙抄』)

などであり、いずれも、祭祀に用いるため鶏に木綿を付け聖鳥を装ったものとして「ゆふつけ鳥」を説明している。単なる鶏なのではない。教長の解釈は、単純化してかえって底が浅くなった感があるが、ここでも、他注とは異なる説をあえて提示して特色を出そうとした教長の作為をうかがうことができる。

煩瑣な挙例を繰り返したが、以上のように、教長の注釈には、清輔はじめ先行諸注釈に対し、それらを強く意識し、それらとは相違する独自の説を提示しようとしていた注釈が、いくつかあることを見てきた。清輔からは、所説を教示されていたはずだが、それをむしろ隠蔽しようとするかのようなのである。その意図は、再び、この古今集注釈が開始された動機に想到すれば、確認できる。教長は、自説の独自の価値を高め自身の学識を誇示することによって、自己宣伝と自身の復権とを目指したのである。

しかし、新奇な説を自在に創造し、いわゆる「ひがごと」を捏造してゆくことは、確かに一部の歌注において行われてはいるが、教長は、おおむね抑制的であることは、再び付言しておきたい。これは、むしろ、清輔の態度の継承といえるのかもしれない。

四 有職語りへの展開

『教長古今集註』の特質として、宮廷の有職故実関係の注が豊富なことを浅田徹氏は指摘している。⁶⁾ 教長は崇徳院側近という経歴を生かし、「伝授において随所で和歌自体から離れ、有職語りを持ち

込もうとし」たが、それは「古今集を古文献として歴史的に位置付け、現在との差異から教えるべきことを創出」することによって、「詠歌は故実の実践として描き出し」たものであると述べた。本稿とは、やや視点を異にするが、氏の論に依拠しつつ、この有職語りについても私見を述べてみたい。

たとえば、「むらさきの色こきときはめもはるに野なる草木もわかれざりけり」(八六八)に対する注釈に、

(『教長註』)

(『奥義抄』)

コトバニ、メノヲトウトヲモテ
トカケルハ、ナリヒラガメノヲ
トウトヲメニシタリケルヒトノ
モトヘ、ウエノキヌツカハシケ
ルナリ。ウタニ、ムラサキノイ
ロコキトキハトヨメルハ、四位
ノウヘノキヌハ、ムカシムラサ
キニソメケリ。メモハルニトイ
ヘルハ、クサキノメグムライフ
クサキノメグミヅルハ、ヨロ
コビニヨセタリ。四位ナドニシ
タリケルヲ、カクヨメルナルベ
シ。
是はめのはらからなりける女
のもとへうへのきぬやるとて
よめる歌也。めもはるとは、
目も遙にといへる也。女をむ
らさきによそへて、むらさき
の一もとゆゑにめもはるかに
野に見ゆる草木のいづれとも
なくむつまじきやうに、この
人を思ふ心ふかきゆゑ、はる
かのやからまで思ひすてられ
ぬとよめる也。

というのがある。両者とも詞書にいう詠作事情から説き起こし解釈を進めて行く。しかし、歌中の「むらさき」の語の解釈のところで、清輔は「むらさきのひともとゆゑに」の歌を証歌として女の比喻と解する、これに対し、教長は「四位ノウヘノキヌ」の色であるとするとところから有職故実に逸脱して展開してゆくのである。これを起点として一首の解釈も大きな相違を見せている。「むらさき」の語

義から、自身の得意とする有職故実へと論を進めてみせたわけである。

ほかにも、

寛平御時ニ、ウヘノサブラヒニハベリケルヲノコドモ、カメ
ヲモタセテ、キサイノミヤノヲホンカタニ、ヲホミキノヲロ
シ、キコエニタテマツレタリケレバ

(八七四)

ヲホミキトハ、サケヲイフ。サイバラニモ、ソホミキマイル、
マユトジメ、トウタヘリ。マイラセヨト、イフナリ。コレハ后
宮ニハ、造酒司日々酒ヲマイラス、ソノヲロシマウシニ、殿上
人カメヲ、サケイレムタメニ、タテマツリケルヲ、マヘマデト
リイデ、蔵人ドモワラヒケリ、トイヘリ。蔵人ハ、女蔵人ナ
リ。ウチニモ八人ハベリ。后宮ニモハベル也。

という注がある。『奥義抄』注釈は省略するが、同注釈が、「たまた
れのこがめ」という歌の語を問題にするのに対し、教長は、右のよ
うに、詞書のことばをとりあげ、宮廷での「ヲホミキ」の故実へと
論を展開するのである。これも、清輔の注釈に触発されたことで
あるように思われる。

清輔と教長の両者とも加注している注釈をとりあげて比較してし
てみた。もちろん、教長が、古今集歌の注釈において宮廷の有職故
実へと話題を展開するのは、『奥義抄』と重複する注ばかりではな
い。清輔説という目障りな契機がなくとも、教長は、得意とする有
職へと注釈を展開してゆく場合も多い。これも、前節で述べた、先
行説に対抗して異説を提示して、自身の説の権威化を図る、そのた
めの作為の一環として位置づけることができる。

私は、このような論述展開は、我田引水的なそれにすぎないと考
える。有職の語りそれ自体は意義はあるとしても、教長から守覚へ
の古今集注釈伝授はあくまでも歌学伝授の場であり、その枠外へ逸

脱する注説は、それが故実としての真实性、重要性を持つがゆえに、
かえって恣意的な意味しか持たないと思うのである。

『教長古今集註』は、自説の価値を高め自身の復権を企図するとい
う、きわめて世俗的一面を有している。先行説（特に清輔説）に
触発され、それらにあえて異を称えるような奇説を提示し、場合に
よっては、歌の注釈から離れ、自身の得意とする宮廷故実へと論旨
を展開する、一貫性の欠く注釈態度であるといえよう。教長の歌合
判詞に対し、「場当たりの」という評があるが、古今集注釈に対し
ても当てはまるであろう。

五 難義に対する態度

その意味で、教長の難義に対する態度は興味深い。

四七六番歌詞書の「左近の馬場のひをりの日」は古来有名な難義
である。この語句について、教長は、

コレツネニ、人ノ古今ノ難疑ナドマウスメリ。シカレドモ、ヤス
キコトナリ。マユミトテ、イマニコノコトアリ。五月三日ヲ左近
ノアラテツカヒトイフ。五日マテツカヒ、四日は右近乃荒手結、
六日は真手結ナリ。コノアラテツカヒノヒハ、テドモノコノエト
ネリ、ミナ水干袴ニク、リアゲテ、カチヲキタルガ、ソノシリノ
ナガキヲ、ソナノナカユヒタルヤウニ、ヒキイダシテ、ソノウエ
ニ、ムカバキヲユフナリ。サレバ、コノアラテツカヒヲヒウリノ
日ヲトハイフ。コノコトドモ朝ノ大事ナリ。(下略)

難義注釈は、歌学者がその学識を最も誇示でき、他の学者を圧倒
できる絶好の機会であろう。教長は、それを「ヤスキコトナリ」と
簡単に切り捨ててしまう。

この箇所本文が定家本では「右近の馬場のひをりの日」となっ
ていることをめぐり、『袖中抄』本文や諸注釈書での解釈から『古

今集』本文の問題に一石を投じた、後藤祥子氏の卓論があり、注釈史の整理もなされている。ここでは、「左(右)近の馬場のひをりの日」が、節会の一連の行事のいずれにあたるかのみに絞って諸注を検してみると、

五月三日左近の荒手結……教長註

五月四日右近の荒手結……綺語抄

五月五日左近の真手結……俊頼説(『顕昭古今集注』所引)、

奥義抄、顕昭注

左近馬場の西、洞院より東の町の引き入りたる所……童蒙抄となり、諸注によりさまざまであり、難義とされていたことが如実に見てとれる。教長も、それらに伍して一説を提示しているのである。しかし、難義としての苦渋に満ちた研究史は「シカレドモ、ヤスキコトナリ」と簡単に無化してしまうのである。そうなれば、「朝の大事」という自身の説も相対化されて軽いものになってしまうだろうが、その危険を顧みずの発言である。重代の歌学者ではない教長の、屈折した自己主張という評価も可能ではあろう。

他の難義語についても、たとえば、前に掲げたように「ゆふつけ鳥」(六三四)や「たまだれのこがめ」(八七四)など、きわめて簡略な注釈ですませている。また、後に古今伝授で、三木三鳥の秘事となる次例にしても、

ヲガタマノキ(四三二)

紀友則

カ、ルキノ名ハベルナリ。

カハナグサ(四四九)

清原深養父

カ、ルナハベルクサノアルナリ。

などとするだけで、何の本草をさすのか追究しようともしない。そ

のようなことには、教長は、関心がない、追究する必要性も感じないかのような態度を装っている。

それに対して、顕昭らは、用例をあげ傍証をくわえて詳細、執拗に論証しようとしているのはいうまでもない。教長の態度は、難義を難義とも扱わない。おそらく、顕昭のように壮大な博引旁証を展開するような歌学的蓄積を持たなかった、教長の手には負えるところではなかったというのが、正解であろう。前節までの論旨のつながりからいえば、異説を提示し、あるいは有職語りに持ち込もうとしても、その用意がなかったのである。

しかし、難義を軽視する(せざるをえない)態度は、逆に、積極的な意義も持ちうる。本稿では、これを積極的に評価してみたいのである。難義注釈は、和歌の断片にのみ注視し、ともすれば、一首全体を見失ってしまうことになりかねない。教長のような、難義にこだわらない注釈態度は、和歌一首を一首として虚心に読もうという態度につながっていく。「口語訳的」と悪評が高い注釈であるが、多くの歌に適用してみせたのは、この態度であった。佐々木八郎氏も、「全体としての歌意を端的に明らかにすることに重点を置き、(中略)この一首の歌意を重視して歌の通釈を付したことは、特筆して置かなければならない」と述べ、高く評価している。

その意味で、教長の態度は、定家の次のような態度に通底しているように思う。

ただこの趣をわづかに思ふばかりにて、おほかたの悪し良し、歌のたたずまひ、さらに習ひ知ること侍らず。いはむや難義など申す事は、家々に習ひ所々に立つるすぢのおの侍るなれど、さらに伝へ聞くこと侍らざりき。わづかに弁へ申す事も、人々の書き集めたる物に変わりたることなきのみこそ侍れば、はじめに記し出だすに及ばず。他家の人の説、些か変れること侍らじ。

『近代秀歌』

定家も、「難義など申す事は、家々に習ひ所々に立つるすぢおのおの侍るなれど、さらに伝へ聞くこと侍らざりき」と述べ、歌学史（注釈史）があまりに難義注釈に拘泥してきたことを、間接的なながらも強く批判している。定家は、和歌を個々の語に分断して、ともすれば学問のための学問に陥りがちな和歌注釈を否定し、多様な和歌表現の規範を求め、詠作の詩想と表現の源泉とすべく、鑑賞主義的な和歌読解、和歌の文芸性の究明の重要性を主張しているのである。

教長が定家のような和歌の読解・鑑賞に対する定見を自覚的に保持していたとは考えられないが、難義軽視の態度は、このように、はるかに定家の思想に通じていると考えてもよいと思う。教長は、清輔らの歌学者に対抗する形で注釈を進めてきたし、そもそも、教長の古今集注釈は、『古今集』という歌の集の集としての注釈として出発したのであった。教長は、無自覚的にも、歌学的先入観を排し、虚心に和歌を一首の和歌として読解する態度をもって、注釈に臨んでいたということができよう。それは、歌学に対する反省や、和歌史の自覚的捉え直し、あるいは『古今集』規範意識の胚胎など、教長同時代の和歌表現をめぐる批判的機運に乗じたものである。その意味で、教長の古今集注釈は、教長自身の意識とは別のところで、間接的にでも、後の新古今的な和歌世界を用意するような意義も有していたといえるのである。

もちろん、過大評価は慎まねばならないと思う。『教長古今集註』は、通説、先行説に対し異説を称えようとしたり、難義を無化したたりするような注釈ではない、主流となっているのは、単純な、口語訳的な注説である。本稿のここまでの論旨からの展開としては、教

長注釈の主流の注釈について検討しておく必要がある。そのような、単純な注釈の注釈方法は、いくつかのモデルに分けて分析してゆくことが可能だと思ふ。それについては、本稿の続編となる別稿において論じてみた。¹⁰⁾

- (1) 拙稿「古今集注釈史の始発——崇徳院御本をめぐって——」〔『文芸研究』144集、平10・3〕
- (2) 注釈伝授の場における『古今集』本文の問題については、浅田徹「教長古今集注について——伝授と注釈書——」〔『国文学研究』122集、平9・6〕に詳細な言及がある。なお、これは、教長の注釈伝授の場の問題についての優れた論であり、本稿も裨益されるところが多かった。
- (3) 教長の伝記的事跡については、岩橋小弥太「藤原教長」〔『国語と国文学』昭28・12〕、多賀宗準「参議藤原教長伝」〔『史学雑誌』昭14・4〕、高崎由理「藤原教長年譜」〔『立教大学日本文学』56号、昭61・7〕などに拠っている。
- (4) 太田晶二郎「『桑華書誌』所載「古蹟歌書目録」——「今鏡」著者問題の一徴証など——」〔『日本文学士院紀要』12巻3号、昭29・11〕に拠る。また、『拾遺古今』については、小沢正夫「拾遺古今についての憶説」〔『和歌文学研究』30号、昭48・12〕、「平安の和歌と歌学」昭54・12所収参照。
- (5) 小川豊生「『俊頼髓脳』の歌語と説話——〈異名〉からの接近——」〔『日本文学』昭61・10〕、同「〈本文〉と〈今案〉——院政期歌学のディスクール——」〔『古典研究』1号、平4・12〕
- (6) 浅田徹「教長古今集注と始発期古今伝授の諸問題」〔『和歌文学研究』77号、平10・12〕
- (7) 萩合朴「平安朝歌合大成」第八卷（昭和40・4）所収、「三井寺山家歌合」（教長判）の「史的評価」の項。
- (8) 後藤祥子「『左近の馬場のひをりの目』——高松宮本袖中抄の本文——」〔『日本女子大学紀要』文学部、34号、昭60・3〕
- (9) 佐々木八郎「註釈における学の発展」〔『中世文学の構想』昭56・10〕
- (10) 拙稿「教長古今集註」注釈の方法」〔『文芸論叢』36号、平12・3〕

本文は、『教長古今集註』は京都大学付属図書館蔵本（四―三／貴／コ一）、『顯昭古今集註』は内閣文庫蔵本（二〇〇―一三）の、それぞれ紙焼写真本により、私に清濁を分かち句読点を付した。『奥義抄』は「日本歌学大系」第一巻所収本（志倉須賀文庫蔵本）、『諸雜記』は、濱口博章『中世和歌の研究——資料と考証——』（平2・3）所収翻刻、その他の資料は、「日本歌学大系」など通行の活字本によった。